

「アイシヤ姉……」

「どうしたの？ アルス君
すっごく切ない顔してるよ〜」

「お願い……アイシヤ姉……
こんなの……はずしてっ……」

「ごめんねアルス君
いくらアルス君のお願いでも
それは無理かなあ」

「可哀想だとは思っけど……
ご主人様がダメだって言うんだもん♡」



「貞操具で抑えつけられて
おちんちん触れなくって
私がご主人様に
使っていたいているの見て
溜まってるんだよね？」

「アルス君もお兄ちゃんと同じ
まわりの女の人をせえんが奪られて
興奮しちゃうマゾだもんね♡」

「可哀想なアルス君
「お兄ちゃんに似て
カスみたいなの粗デニに生まれて」

「でも顔は可愛くって良かったね
そのおかげでご主人様のお
役に立てるんだから♡」

「俺……俺はっ……」

「あ……♡」「主人様あ♡」

「なるっ！めんね
おしゃべりはおしまっ♡
ご奉仕の練習の時間だよ♡」



「ほら立派なおデニボ♡
わかるでしょう？
アルス君やお兄ちゃんじや
絶対敵わないオスなんだって」

「Fuuu...」



「アイシや姉それ……」

「偽物のおちんぽ♡
これを見操具♡……ほら♡」

「私が犯されてるという事もある
アルス君があんまりにも
羨ましそうな顔してたから
ご主人様をお願いしたの」

「アルス君の粗デンを
シ「ん」のはダメだけど
これなら「ん」「ん」「ん」つてめげりも「ん」「ん」」



「ほら頑張って♡」

「あっ……アイシヤ姉っ♡」

「ふふっ……♡
アルス君がこんなにおっきかったら
みんな奪られなかったのにね♡」

「ほほほー♡ー♡ー♡ー♡」



「んっ♡
ご主人様の指い♡
アルス君の可愛い粗チンより
ずうっと……ぶっさいっ♡」

「あっ♡んちゅっ♡
あぁっ♡アイっ♡ シャ姉っ♡」

「自分で乳首もーんっちやって
可愛いなあ♡
ほらん♡ん♡」

「あっ♡あぁっ♡
俺っんっちゅっ♡ あぁあっ♡」



「あーあもうイッちゃったんだ♡
ご主人様あアルス君のおちんぽしやぶり
いかがでしたか？」

「悪くない
さすがはお前の仕込みだけはあるな
ほらいケっ！」

「あっ♡んいつ♡あっ♡
イッ♡イクッ♡指でっ♡
おまん♡イクうっ♡」

























